



と云うこと、取りあえずは、ガイアーン迄で出て、バスでピーターバラへと移動し、そこから  
ドッチでの再スタートと云うことにした。バス代は二五ペンスだった。

それ、再出発地点へと移動してはみたもの、それでも、なかなか容易には車を拾えなく  
時間を費やしていたものだった。

「やはり、ドッチでの旅行と云うのは容易なことじゃないな。諦めた方が良いのかなあ……。  
そんな弱音の雑念も過ぎたりする中で、漸く、次に停まってくれたのは五十歳前後位の紳士、  
ブライヤン氏だった。

「こんにちは。私は今、エジンバラを目指しての旅行中なのですが、途中の何処迄でも結構です  
の、乗せて頂けませんか？」

「こんにちは。まあ、途中のニューアーク市迄なら、いいよ。どう？」

「有難うございます。私はイナヤマ・サトルと申します。日本からの旅行中です。宜しくお願  
いします。」

「こんにちは。私はブライヤンと云うものです。ニューアーク市に住むのは、今は帰郷の途中  
です。」

軽い雑談を交わしながら、しばらく走っている内には、お昼時の時間帯に差し掛かって来てい  
た。

「なんでも、お昼になると、良かったら、我が家にも、誘って行くか？」

「へー。それは、嬉しいですね。ありがとうございます。」

「はい、はい、ブライヤン氏の、由緒長い招待頂戴だ。

「こんにちは、私の妻、私の中学生の娘、サトーと小学生の息子の二人だけ  
と、私への家族の紹介を頂いた。

子供たちも、なかなか笑顔をくれて、軽く握手をする。

本当、可愛くて、素敵な子供たちだなあ、と、内心、思ったものだった。

「それ、

「こちらは、サトル君と云って、日本からの旅行者だよ。これから、エジンバラに行くんだ  
と、家族への紹介を頂いた。

「イナヤマ・サトルです。今日は、田村様にご主人様に拾って頂き、ありがとうございます。お招き頂きまして大  
変嬉しいです。ありがとうございます。」

丁度、お昼時でもあり、奥さんの手作りのランチを、家族皆さんと共に馳走頂いた。

ドッチハイクの旅行を通して、現地の人達とのふれあいや、また、おもてなしの人の  
優しさみたいなものに接する機会と云うのは、本当に有難いものであり、一番の幸せな瞬間でも  
あり、旅の醍醐味と云っても言えるだろう。また、道中での楽しい、良い思い出もあつた。

ランチを頂く、そして、お昼の休息のあと、家族の皆さんも見送られながら家を出る、



「解りました。明日は、市内のあちこちを見学してみようと思います」  
「君は、今夜は何処に泊まるのかね？」

「ヒッチハイクの旅行ですから、いつも、予定や予約は無いのですが、ユースホステルがあったら利用したいとは思っています」

「そうかい。。。じゃあ、ヨーク市内のホステル送は送って行くよ。夕食は、馳走するよ」「何かしら何かを、親切に、ありがとうございますです。」「。

すっきり、雨模様の中ではあったが、スタンレイ氏にはレストランでの夕食を、馳走になった。

「何でも好きなものを取りなさいよ。」「。

今、ヒッチハイク、レストランのテーブルの上を、トレーを滑らせながら好きな食品をトレーに取って進むという設備と手法は何処でも見かける光景なのだが、当時に見掛けたのは初めての機会ではあった。

東京での生活をしていても、日本の国内で初めてそれを見掛けたのは、それから半年くらいを経過した年末か翌年始辺りでのことだった。

レストランでの夕食を、馳走になったあとには、市内のユースホステル送送って戴いた。

「じゃあ、お別れだね。ほんの少しのお手伝いだったけど、幸運と日本に無事に戻り着くまでの旅行の成功を祈っているよ」

「ありがとうございます。良い思い出になりました」

今回のヨーク市内のユースでは、初めて同宿の日本人客が加藤氏だった。

彼も同様にヒッチで旅行中だったので、意気投合して話が通じ合ったものだった。

「ヒッチで行こうー！日本人の誇りをもってー」とのメッセージをくれた。

（八月六日、月）

翌日には、何とか雨は上がったものの、どんよりした空模様だった。

朝の九時半過ぎにユースを出たが、前日のスタンレイ氏のアドバイスを得ていたので、市内のヨークミンスターや、あちこ





したから……。仕方なく、ここで宿泊  
してしまいました」

「そうでしたか。エンジンバラ返はまだ  
少々、距離がありますが、道中気を付  
けてください。幸運をー」

「あ、ありがとうございます」

想定外の無料施設での宿泊ではあつ  
たが、警察の方では、たまたまの通り  
がかりに、電話ボックス内のホームレ  
スらしき不審者(？)に気付いての声  
掛けだったのか、或いは、近隣からの通  
報による駆け付けだったのかは不明な  
もの、ともあれ、無事に一夜を明か  
せたものだった。

ボックスから出る、再び、ここから  
のスタートとなる。

運次第ではあるのだが、やはり、なか  
なか、車を拾うのも容易なわけではな  
い。

漸く、拾えた一台目では余り距離を稼げることが出来なかったのだが、幸い、今度は余り時間を要  
しないで、次の二台目に繋ぐことが出来た。



「済みませぬ。エンジンバラを指摘してはるんですが、途中迄でも乗せて頂けないでしょうか？」

「ああ、僕らもエンジンバラ返だから、いいよ。よしよし」

「ありがとうございます。私はイナヤマ・サトルと云います。宜しくお願いいたします」

「オレはケリー、彼女はナンシーだよ」

「ハネムーン旅行ですか？」

「そうですよ。レンタカーでの旅行中だよ。カリフォルニアから。君はどこからか？」

「あ、私は日本からです。イギリスに入ってからでは、もう三週間くらいになります。ウイスキー  
ーチという所の農場キャンプで二週間を過ごしましたが、そこを出てからのヒッチハイクで、今  
日は三田目です。なかなか、ヒッチハイクの旅行も簡単ではないですね。🦋 昨夜にはトラック  
から降ろされた所が、あの田舎の何も無い寂しい所でしたから。仕方なく、近くにあった公衆  
電話ボックスの中で寝ましたよ」

「はは、それは大変だったね……。じゃあ、その内にドライブインでもあったら、朝食にでもしよう  
か？」

「なにかな」

ともあれ、二人だけの水入らずの中に割って入った様なお邪魔虫ではあったかも知れないのだが、若者の旅行者同士という点では相通じる処があった様な気がしたものだ。

途中のドライブインでは三人で一緒に軽い朝食を摂り、お昼前の十一時頃には無事にエジンバラの市内に到着した。

「着いたね」

「ありがとうございます。助かりました」

「良い旅行を！ 幸運を！」

「あなた達も良い旅行を！ そして、お幸せに！」

と声を掛け合って彼らとの別れがあった。

その後には、市内のインフォメーションセンタ

ーに着いて、バリーフレットを買っていたところまで、ポンポンと、後ろから軽く肩を叩かれた。振り返ると、ウィズビーチのキャンプで一緒だった千村君だった。

「いやぁ、まさか、こんな所で面識のある人に出会うとは……」。凄い偶然だなぁ(笑)「と、お互いに驚き合ったものだった。

「稲山さんは、ここまでお越しやって来たの？ 全部、ヒッチハイク？」

「イエス。ザツ・オール。結構、苦勞したよ。ヒッチハイクも甘くはないなぁ。(笑) まだまだ、この後にはロンドン迄の戻りもあるんだけど……」

「全コース、ヒッチハイクとは凄いなぁ。😲 お気を付けて!! 頑張ってください」

「お互いに。良い旅行を!!」

と、彼とは二度目の別れがあった。

その後には、市内を一巡して、夕方には市内のユースホステルに辿り着いた。

エジンバラではロンドンに次いで、多くの日本人(らしき)旅行者を良く見かけるようだ。

街中でのショーウィンドーを覗いてみても、馴染みの日本製品を良く見かけるのには驚いた。日本経済の成長の勢いと云うのが何処に行っても身近に感じられる様だった。

ユースでは、他に日本人客と云うのは見当たらない様なので、おそろしく日本人客と云うのは殆どの場合、普通に旅行会社を通しての事前予約で一般のホテルを利用しての観光客となっていた。



(八月八日、水)

翌日の午前十時半頃には街に出て、エジンバラ城やカルトンの丘、スコットランド国立美術館などを見学した。

初めて見るスコットランドの首都エジンバラは、中世の雰囲気そのままに残り、歴史の重みを感じられる美しい街並である。

エジンバラ城はキャッスル・ロックと呼ばれる岩山の上に建つ古代からの要塞城である。

幾度かの戦争の度に破壊されては再建され、の繰り返しがあり、スコットランドの歴史の証人とも言われる古城である。

その高台から眺める街の全景と周囲の眺望は素晴らしいものだった。

終日、あちこちを歩き回っていたので少々疲れてしまったが、夕刻の六時半頃にはコースに戻り着き、もう一泊するつもりだった。

翌朝には、なるべく早めにコートを着て、ロンドンへの帰路に就こうとは思っている。

(八月九日、木)

なるべく、早めからの出立を考えてはいたのだが、あいにく、朝からの小雨模様である。コースからは出るに出不れず、仕方なく、しばらくはロビーに居残って、日本の知人への手紙を書いたらしい過ごし方。

午前十一時を過ぎた頃には、漸く、外を歩いても濡れないで済むだろうかと思える程度の霧雨にはなってきたので出掛けることにした。

太陽の位置が判らないので、方向感覚も良く判らないのだが、大体の感覚的に、凡そ二時間余りを、車も拾えないままに歩き続けた。

時折、雨が降り出したりする様な空模様であり、加えて風も強いので、尚更のこと、なかなか車を拾うのも難しいようだった。



出鼻をくじかれた様な矢先ではあったのだが、漸く、大型トラックが停車してくれた。

「ロンドンの方向に向かうのですが、何処かの途中迄でも良いので、乗せては頂けないでしょうか？」

「ああ、ロンドンには行かないけど、途中のリバプール迄ならイイよ。乗りなよ」

「リバプール迄でも、何処迄でも大丈夫です。ありがとうございます」

かくして、漸く、復路での最初の車をキャッチ出来たのだが、エンジンバラへの往路では十台くらいを乗り継いだのに比べると、今回では、いきなり復路の概ね半分くらいの距離を確保出来たのだから、少しだけ、コースを外れるものの、幸先、悪くはなさそうだろうか……。

道中の途中では、ドライブレインでのコーヒーと軽い夕食をご馳走になったが、リバプールに到着して降りた時は既に、夜の十時を過ぎていた。

何しろ、暗がりの中では現在地がリバプールらしいと云うだけで、それ以上のことは周りの風景も含めて何も判らな。い。

只、所々の街灯を頼りに歩き周り、何れのユースなり、安そうなホテルなり、適当な宿泊場所はないだろうかと、約一時間くらいを探し歩いたものだった。

然しながら、既に、時間帯も遅くなり見付からないので、適当な公園でもないだろうかと捜し歩いては、漸く、所々に立木のある芝生の原っぱがあったので、その立木の下で、寝袋での野宿とした。

日中の天気も余り良くはなかった様で、空も殆ど真っ暗なのだが、周囲は団地に囲まれた中庭の原っぱの様な気配があった。

暗闇の空を見上げながら、その昔には、ビートルズもこの地からのデビューで世界に踊り出たんだなあ……。そう言えば、中学時代に海外文通でやり取りしていたニーナ・マリアと云う子の住所も確か、この辺りの地だったような……。な。ど。と。色々と、妄想が流れながらの寝付きとなった。



翌朝に目覚めると、やはり、周囲を団地に囲まれた中庭の様な場所での芝生の原っぱだった。それはそれで良いとしても、寝袋の端の方では犬の落し物を少々踏んでいた。(こんな所で…。犬の落し物は飼い主の責任で、ちゃんと始末をして欲しいものだ…)とか何とか、何処かにぶつけた様な心情はあわども、まあ、又何を言える様な立場でもない。😞

( 八月十日、金 )

ともあれ、夜半には雨には見舞われずに済んだので、何とか安眠を得ることは出来た。

起床後には、傍田に目立たない内に、と荷物を纏めてから歩き始めて、一時間余りを過ぎた辺りからピッチを始め。

次に停まってくれたのは若い女性ドライバーだった。

「ロンドン迄向かうのですが、途中の何処迄でも構わないので乗せて頂けないでしょうか？」

「そんなに遠くまで行かないので、少ししか乗せてあげられないですよ。」

「ああ、何処迄でも大丈夫です。助かります。」

「どうも。あなたはどちらからいらっしゃいますか？」

「日本からです。もう、イギリスに来てからは三週間以上になります。これまでは沢山の方向に乗らせて頂いたのですが、あなたは随分、お若いですね。」

「十八歳です。」

「はい。お仕事をどうされていますか？」

「ええ、そうですね。今の道中までの少ししか乗せてあげられないけれど、めんなさね。」

道中での愛想も良かったの、朝からの天気も晴れ上がってきた様な気分ではあったのだが、距離が短かったのは、少々残念なところでもあった。

もう少し、あと二、三時間くらい距離でもあれば、もっと仲良くなれたのかも知れないだろうか…。

次のチャレンジャーは、たまたま、リュックを背にした地元英国青年との出逢いがあった。

「ハイ、君は何処迄？」

「ロンドンです。」

「ああ、オオ、オオ、私も一回いっただい。」

「オーケー。」

こちらから先の声掛けだったかは定かでないもの、お互いに目が合った瞬間での以心伝心と云った様な処だろう。頭の中での妄想は同じ状況なので、会話上でのやり取りはそんな処だった。

かくしてこの間は二人での旅の道連れとなった。

ほぐすようにして、運ぶ大型トラックを拾うことが出来た。二人して同乗させてもびびり。

トッチハイクで車を拾うのは場所と運次第ではあるのだが、今回のトラックではかなりの長距離を運んでもらったのは幸運なことだった。

ロンドン手前での、最後にはドライブインに立ち寄って、運転手さんを含めた三人での軽い朝食を取る。

トラックの運転手さんとはここで別れる。

ゴールのロンドン迄はあと一時間程度と云った様な処らじこ。

その後、今度はは英国青年とのコンビでロンドンを小型車を拾うことが出来た。

凡そ一時間くらい走行後にロンドン市内の地下鉄駅まで送り届けて頂いた。

ここで運転手さんと英国青年とも別れを告げたあとに、地下鉄で移動し、市内ケンジントンの目当てのユースホステルに到着したのだが、空気が無いとの理由で断られる。

他のユースにも足を運んでみたものの、やはり、ここらへんも同様だった。

仕方なく、今宵はハイドパークのベンチでの野宿とした。

想定外ではあったのだが、野宿の二連泊となった。

当然のことかも知れないだろうが、七月、八月のロンドンのユースと云うのは格別に混雑するものだ。

(八月十一日、十二日)

昨夜来は天気も良くなって来ていたので、公園での宿泊も、まあ、そんなに悪くはないだろうかと思っていたのだが、やはり、ベンチでの奥行きのない窮屈さと、ゴロゴロした硬さの上では寝心地も良くはなかった。

明け方近くには、取り留めない様な夢を何度も見ているものだった。

翌朝には、木の葉の間から漏れてくる日差しが眩しかった。覚めて起きたのは八時半頃であつた。

この後には、特、何処か行くところでもないのだが、取りあえず、ピクトリア駅の付近までを歩いて来た。

ふと、背後から聞き覚えのある様な声が掛かったので振り返ると、何と、エンジンバラでの再会以来の千村君だった。

何と、いつ偶然、奇跡だらうかとお互に喜んで、驚き合ったものだった。

少し話をした後、

「は、お元気で。良い旅行を。」

お互に言葉を掛け合って別れたものだが、そもそも、ウイスマスビーチのキャンプ場で別れた後には、エンジンバラでの偶然の鉢合わせと別れがあり、そしてまた、ここらへんが二度目の別れの機会となったのだから、ある意味、奇跡としか言い様のない程のことだろう。

互に十年輪を回っていて、互に十年輪を回っていて、互に十年輪を回っていて、互に十年輪を回

ものだが、可能なことならば、再会出来たら面白いものだろう。

その後の午前中には、バッキンガム宮殿に足を運んでみた処、丁度、衛兵交代の時間帯を控えていたので、終わりまでを見学した。大変な人出だった。

午後には、ジエームズパーク、トラファルガー広場を散策し、夕方には再び、ピクトリア駅に舞い戻った。

ウィズビーチを出てから、スコットランド方面の旅行中には余り天気が悪くなかったこともあり、肌寒さを感じる様な日々ではあったのだが、今日は天気も回復して晴れ上がったので、真夏の暑さの一日だった。

さて、ドーバーからフランスのダンケルク迄の切符を入手したので、今夜十時のロンドン発の列車では、これ迄二十五日間を過ごしたイギリスともお別れになる。

人生の将来においては、再び、この地を訪れる様な機会と云うのは、果たして、あるだろうか…。

明日からは大陸での行になるが、果たして、様な日々が待っていることだろうか…。



るど旅